

大正十四年八月十三日
第三種郵便物認可

大正十五年八月十二日印刷
大正十五年八月十二日發行

（毎月一回十二日發行）第五卷第六號

真 生

第五卷 第八號

■真に自分を愛するものは何とかして自己の向上と自己の不死とを願はぬものとはありませんまい。乍然真に自己を愛して、永生の道をたどり、真に不死を求めて、一生をこれに献げるものが幾人ありませうか。

■世に自己を愛し、自己の向上を好むものは甚だ多い、乍然真に自らを愛し、自らを生かすところの道に生きやうとする人の少ないことはどうしたことせう。

■世間の多くは肉慾に捕はれ、財慾に左右せられて、真に自らを活かし、人を活かさうとするものがないのです。永生の道、向上の生活、そこに私共は今一步の覺醒を要すべきものがないでせうか。

■私はこの意味に於て、私自身の生命の起源を訪ねて、私の生命が初めて宇宙の生命と一なることを見出しました。吾人は永久に宇宙と共に一である、天地と共に不滅である。

■諸法の無常なるも、諸法の無我なるも、それは宇宙唯一の真我の發展に外ならぬ萬有向上の一大變化である。自分は天地と一なるもの自分は萬有と同體である。眞實の自己は宇宙の生命そのものであると。

■かうした人類の自覺に今日の社會を眺め來るとき多くの人々は未だ眞實の自己を知らないである。肉慾の私か眞の私でなく財慾の私か眞の私でないならば眞の私は一體何でありませう。

■友よかくして私共は初めて永生の道に入り無上正眞の大道に生くべきではないか。（念）

目次

◆人間の灰汁ぬき

越 子

◆佛教の理想と眞生の意義

土屋 觀道

◆唐澤別時會に就ての思出

土屋 觀道

◆唐澤別時三昧會參加者氏名

◆吾友便り

自分に善くなる気がなくて人をばかり世話焼いてゐる、家の者等は信仰が無くていかぬ、家の使用人は不調法でいかぬと他をのみめ立てしてゐる。然し周囲の人が良くなるぬは自分が良くなつて行かぬからである。自分さへ向上し遷善して行けば自然に「家の者」も「召使ひ」も善くなる。

△炭が熱くなれば自然に灰が暖まるやう、先づ自分が火になる事である、すれば灰も暖まり、灰が暖まつて火もよく起こる。

△本當の「老婆心」とは世話焼根性といふことではなく、自分への反省求道心といふことである。それが自分へ及が向けられなくていつも他人へばかり向けられる、そして人を叱り、人を虐げる心になる、これは既に魔道に陥てゐるのである。

△眼が横へ外れ他所の垢捜しになつてゐるのは前に目標がないからである。自分に目的がなく、理想が輝いて居らぬから道草喰ひになつて仕舞ふのである。本當に道に精進し如來のみ心に一致せうとする者には仲見世は要がない。他人は付うあらうと自分に善くなるばならぬ。自分の一生を本當の人生にせねばならぬといふ、この決心が自分を引立て、同時に周囲をも化して行く徹底的に自己ばかりを視る姿が、同時に利他度生にもなり決して利己とはならぬ。それだから一生「先生」になることは要らぬ。(尅)

人間の灰汁ぬき

◆ 鮭だつて獲れた時は旨い、まづくはないのですが、北海道から船で運ばれて来る間に下積になつたのは、上積の鮭から鹽が下りて鹹くなつて仕舞ふのです、そして河岸へ上つた時は安鮭と相場が決まつて仕舞ふ。

◆ 安鮭ほど始末に負へぬ奴はない、煮ても焼いても鹹くて喰へぬ、骨と皮ばかりで干乾らびて居る。けれど人間の中にも随分安鮭が有る、他人ぢやない自分がさうである、全く箸にも棒にもかゝらぬ奴である。

◆ 斯う云ふ辛鮭は仕様がなから水の中へ抛り込んで置くのです、さうするといつか知らぬ間に、鹽氣がぬけて恰度良い加減になつてゐる、骨も肉も柔らひでふつくらしに來ます。

◆ 人間も社會の下積になつて世智辛くなり、引懸けることゝ、搔き込むことばかり上手になつた者は、自分で付う直ほさうにも仕方がない、だからお念佛の水の中へ漬けて置く、するといつか知らぬ間に鹽氣がぬけて柔かくなつて來る。

◆ 信仰が出來た。ものゝ道理がわかつたことでも、却々實際上の行爲は改らぬものではない。此事實上の「人間臭」が一步／＼脱けて來ねば旨い人間とは云へぬ。それには理窟ぢやない事實の念佛の中へ漬かることです。するとだん／＼、灰汁がぬけて甘味が附いて來る、そして匂ひのある人間になつて來ます。(尅子)

佛教の理想と眞生の意義

土屋 觀道

一、
佛教の理想がどこにあるかと云ふことは其の佛教の何者であるかと云ふことを眞に明にした上でなく
ては之を斷言することはできないのである。而も其の佛教が何者であるかと云ふことを明にすることは
其の自身自身自らに其の佛教を理に眞實の體驗を持たなくては之を明にすることはできない。加之、
よく之を明にし、體驗し得たとしても、之を一つの言葉の上に明確に言い現はすことができるかどうか
は更に困難なことである。否それは恐らくできないことである。而も一步之を譲つて本人には之を言葉
に言現はし得たとするも未だ自らに體驗なき人に其の佛教の理想を知らしめることができるかどうか、
少くとも今日の私共の經驗によればそれは到底できないことからである。故に古來佛教の眞相は冷暖自
知の境涯と云つて、冷たいとか暖かいとか云ふ實際のことは其の冷たいもの、暖かいものそのものに自
ら接觸して之を知るより別に仕方がないやうに、佛教そのもの、眞の境涯も其の實際は先づ自ら其の境
地に到達しなければ判るものでない。

故に佛教の理想もその眞相に體驗なきものは絶対に知ることができない。従つて佛教の眞相は未だ佛
教の體驗ないものには絶対に判るものでない。乍然若しさうとすれば體驗なき人々には佛教の教理は説
いても、教へても判らぬことになるし、若し亦、佛教の眞相に徹した人々には既に佛教を聞くの必要な
くなることになるが、若しさうとなれば今日までの釋尊の説法や現存の經典は何等の意味をもなさない
ことになりはせぬか。

茲に於て私共は此の二者の關係に於て、此の二者の矛盾を如何に見るべきか、それは言葉と體驗との
二者の關係が明了にならない限り此の佛教の眞相も亦明にすることはできないことである。

然にさうなつて來ると亦、言葉はどうして成立するか言葉の成立及び其の本質などの研究が大切とな
つて來る。乍然今はさうしたことで研究して之を明にするの餘裕がない爲めに之を略して其の大体に
止め、更に本論には入らうと思ふのである。

さて、言葉と體驗との關係に於て、言葉は私共の思想感情の表現形式であつて、體驗とは其の思想感
情の起るべき根本經驗である。故に言葉と體驗との關係は私共の思想感情の根抵たる一つの體驗が或る
一つの方法によつて、當時の思想感情となつて外部に發表せらるるとき初めて一つの言葉としてまよつ
て表現せらるゝそこには其の人の思想感情の統一を要するものであるが、此の思想感情が言葉として統
一し表現せらるゝ時は、次にその言葉を聞くことによつて、當時の思想感情を復現せしめ、最初の體驗
と等しき體驗の境地に私共を容易に到達せしむることができるのである。此の理は甲乙兩者の間に於て
同じ思想感情の共通するものある時、同じ發表の形式として其の言葉が同じ發音によつて發表せらるゝ
時に一層此の關係が密接して來るのである。乍然此の二者の間に於て其の言葉の意味を異にし又は其の
言葉の意味を知らない時、又は其の思想感情の根底たる言葉の意味の體驗なきとき、私共はどうしても

其の目的を達することはできない。そこに至ると私共は先づ其の言葉の意味の相互に於ける異なりを訂正し、又言葉の意味を知らないものにはその意味を知らしめ、未だ言葉の意味の體驗さへなきものには其の意味の體驗にまで到らしむることをつとめねばならぬ。

二、

茲に於て佛教の真相を知らうとするには先づ佛典の中に含まれた言葉の意味から知つて初めて其の中に組立てられたる佛教の思想感情の内容にまでは入ることができると云はねばならぬ。乍然其の言葉の意味はやはり其の根底に於て其の言葉を意味する佛教の體驗を要するものであることを知らねばならぬ。従て佛典の研究の第一義には主として此の種の意味合をも充分に心得ていないと、とんでもない誤まりを傳へることになるのである。

然し幸いなことには私共の人類生活には相互に共通した一種の生活經驗を有し、且つまたこれらの事柄を通して言葉の發達があり、其の間私共のとるべきものと採るべからざる生活意識の體系的若は斷片的幾多の思想、並に感情言語の經驗を有し、其の經驗や體驗によつて、更に一層の整理統一を計り、或は又更らに之等の事柄によつて一層新しき經驗を深め、或は之を肯定し、或は之を否定することによつて、更に一步、數歩の新なる向上の一路をたどり、或は更に大なる否定の世界より、更に一層大なる肯定の世界を見出し、眞實眞生の體驗を深めることができるに至る。そこに言葉の尊さと思想體驗の尊さが與へられるのであつて、佛教の理想もかくして、各人應分に理解せられて行くのである。かくに佛教があらゆる言葉を否定してあらゆる言葉を超越した體驗の世界を示さうとし、而も亦あらゆる言葉を以

つて此の體驗の世界を語らうとする所以がある。

乍然、佛教の言葉は畢竟言葉の中に含まれた、言葉の意味そのものを通じて、言葉の根底たる思想感情の世界より、更に無言絶慮の純粹體驗の世界にまで吾人をして到らしむるにある。

乍然無言絶慮の體驗と雖も、嚴密に之を考察し來れば凡そ一切の言葉は一として此の言葉なき無言純粹の體驗から出て來ないものとは無いのであるが、これを普通の常識的に云ふならば同じ經驗の中にも主として私共の生活中心の要求に近いものと、遠いものと或は亦私共の生活意識の上に誤られた所から來たものと來ないものがあつて、私共の實際生活に最も適切であるものとなしものとなさへあるのである。従て同じ體驗と云つても是等の一切に對し、私共の求むる眞の體驗は無言絶慮の純粹經驗と云ひ條、最も私共の向上生活に欠ぐ可からざる純眞の體驗を云ふのである。

三、

此の意味に於て、佛教の説くところが主として言葉の上での説法でなく、又單なる思想感情の上での思想問題でもなく、寧ろ是等の言語、思想感情を超越したる純粹體驗の世界にまで私共の生活を深めやうとしてゐることは明に之を觀取することができるのである。それは何れの宗教も殆んど聞信理解を以つて止まらず殆んど、悉くが行證の世界を説かないものとは無いのを以つても知るべきであるが、殊に佛教が言語思想の世界を絶して、直に宇宙の本源と自己そのものとの直接經驗の世界にまで私共を引入れねば止まない所のがあつて所謂私共の純粹經驗をして、人生の根本要求たる永生不死の自覺にまで吾人を直面せしめやうとするもののあることは一見して明かなところである。従て此のことを私は

人類生活の根本要求であると云つてゐるが、而も此の心境を思想感情若は言語文字の上に表現すれば、それは一切人類の根本生活の必須要件の中心生命をなすものである。からして、時處位に於ける一切の人類生活の中心理想をなすものであつて、之に合する一切の思想感情及び言語は主として是より出でたものと云つてもよいのである。従てまた此の思想感情及び言語の源泉こそは再び一初の人類の思想感情及び言語の歸趣するところであると謂ふべきである。

乍然同じ直接經驗の世界と雖もそこには私共の直覺的に欲するものと欲せないものとがあつて、それに對するあらゆるものゝ上に働く活動そのものが直動しつゝあるのを觀る。而して、其の間佛教の正に説かんとするものは其の一切の思想や感情、思慮分別を超越した、其の思想や感情、思慮分別のよつて來たる根本原動そのものを、眞實の自己として、眞に生くべきことを示さうとしてゐることは之また明かなる事實である。従つて其の動くところ最も自己に忠實なるものであつて、そこには寸毫の邪念邪想の浸入するの餘地を與へず、自己が欲するところ直に之を敢行して憚らず、一心以て全身の活動である。而も其の活動や單なる自己の思想や感情、思慮や分別の世界にあらずして、むしろそれらの源泉たり生命そのものゝ本源であつて、宇宙と自己とに一貫せる宇宙大生命の躍動そのものである。従つてそこには一切の善意に於ける思想感情、思慮分別の根本中心の生命の躍動であつて、紛々たる善惡正邪の相對を絶し而も一切の是等を抱括した所の眞善美聖の絶對神境である。

四、

靜に私共の生活を反省すれば、凡そ私共の生活に於て色々の生活形式が生み出され又色々の思想感情が形成せられてゐるのを見る。乍然一體之等の多くの思想感情や生活形式は何を中心として起つて來たのであらうか、そして又今後に於て何が根本として是等の事象が起つて來るのであるか、私共はよろしく是等の根本に直入して、是等の問題を解決し、併せて人類の理想實現に資す可きである。而て之を佛教に見るに、佛教の教理は正しくこゝに一切を出發してゐるのである、一面から見れば佛教の教は一切皆空の教へである、乍然これは反つて片々たるものゝ存在や、思想感情の有無を絶して、直に宇宙の本源に歸るべく無言絶慮の純率體驗の世界に一切を代入しめやうとして説き。そこには一切が有無を絶した皆空である。凡ての有所得を根絶して無所得皆空の宇宙の生命に直入せることを示してゐる。乍然又一面から見ればそれこそ此の皆空の世界より眞實に生きたる真人の生活は無限に向上の一路を展開して、宇宙理想の實現に魂心の力を盡して止まぬものがある。之ぞ人類の理想、献身の大業であつて見るもの聞くもの一として宇宙理想の表現ならざるはなく、一切の煩惱も亦無限向上の一路に展開せらるべき如來の顯現となつて來るのである。

私共の本心は生れ乍らにして永生不死の心を喜び、更に無限向上の一路を楽しむ。そこには永生不死の要求があり、無限向上の要求がある。而て此の要求の充さるゝ所、そこに人生の楽しみあり、そこに人類の發達がある。生存の意義も此の吾人の要求を外にして何れに之を求むることができらう。人類の文化社會の進歩、要するにこれらは一として此の人生の根本要求たる永生と向上を外にしてありうべきものではない。而て亦私共の心の根底に偽りを好まずして眞を喜び、惡を惡んで善を求め、醜きを棄て、美を好むも要するに自己本心の之等を求むるものあるによると云ふべきである。何となれば自己の本

心に満足を感じることもできないものならば真以て真とし、善以つて善とし、美以つて美とすることができないからである。之を以つて之を觀れば一切の事象それらの一切は悉く自己の永生不死の糧となり無限向上の資けとして始めて存在の意義も在りと云ふ可きである。そこに生きるを眞生といふ。

されば佛教の説く所眞實人類の生活はこれ亦眞生の意義に外ならぬ。眞生こそは實に宇宙生命の大道であり。眞善美聖の中心である。

我に來るものは榮え我を去るものは亡ぶと私は嘗て豪語した。然乍此の私の叫びは今も尙昔に寸豪の變りはない。友よ心して我が眞生の意義を見よ、我に來たるものは榮え我を去るものは亡ぶ、我は宇宙の大道に立てばなり、と是の自覺に立つてこそ始めて私共は眞實に生きる者と云ふ可きです、私此の心を以つて自分を見、また一切の人を見る。そこに眞人の別れ目が裁然として見えて來る。我に來る者は榮え我を去る者は亡ぶ。佛教の理想も亦この外にはないのである。(八、三)

眞生同盟に就て

近來各地の道友中に於て、自覺ある宣傳の活動は眞に私共の喜びとして涙ぐましい位であります。殊に今までの様な單なる寺院宗教のあこがれでなく、各自自覺ある眞人の生活として如來を中心とする眞生運動に眞實の活動を見ることは更に喜びの極みであります。最近名古屋醫科大學、四國高松高等商業、全高松工藝學校、大阪南區役所、大垣中學並に女學校其他近々に杉根高商、高松高商等に出演の豫約あり、之皆一に我道友の運動の賜に外なりせん、かくて吾人の眞生同盟が各地の學校、役場並に有識社會の理解と共に全人類の眞生運動たることは更に私共の期待して止まぬ所であります。願くは友よ、全身の活動に立つて下さい。

唐澤別時會に就ての思出

土 屋 觀 道

信州唐澤に於ける三昧會へは私にとつては思出で多い所の一つであります。

それは此の地が昔彈誓上人の開山地として名高く、又其の後徳本行者の遺跡地として念佛信者に懐かしい所の靈地であるからと云ふのではありません。否これ等の名僧高德の先覺が念佛三昧にたてこもられたといふ一種の靈地であると云ふことが此の地をして其の名を高からしめた所以であることはもとよりであります、私にとつては更に夫れよりも私自身にとつて限らない思出で多い舊跡の一つであるからであります。

私共に於ける唐澤の三昧會は今から十一二年の昔丁度京都の知恩院勢至堂で光明會の三昧會が越後の淺井法順上人の首唱神奈川の笹本戒淨上人の讚同のもとに山崎辨榮上人、中島觀琇老師及び私を中心として開かれた前年に當るのです。従つて

其の頃は未だ全國的に別時三昧會などと云ふことは多くの世人には夢にだも知られない頃でありました。

どうして私共がこゝに初めて三昧會を開くやうになつたかと申しますと、それは全く越後の淺井法順上人の新しい發起によると云ふべきです。今時の人々、殊に光明會員と申す人々で此の唐澤の三昧會を知らない人々としては殆どありませんが然しどうしてかうまでも此の唐澤の三昧會が世間に名高くなつたかと云ふ最初の縁起は恐らく知らない人々が多いかと思ひます。最もそれを知ることが何も念佛の上に必要であると申すのではありませんが唐澤の念佛に關して昔の歴史を知ることが、道友の喜びとして又捨つべきものでもありません、それに就て今でも北越の天地に淺井上人がゐられたなら、如何ばかり如來のみ光りが一層深く北越の彼所にも輝くことであらうのにと、幾度か思出されてならぬのでありますが、今は已に故人として、辨榮上人よりも一二年先きに他界せられてゐられます。然に師はかねてから宗學の譽れ

高く、殊に浄土宗の宗史に於ては學者仲間の重鎮でありました、而も毎年知恩院の加行僧の爲めに永く宗史宗乘の勤戒師たることもあつたのです。或る歳、越後の佛教講習會で笹本上人によつて痛切に自己の不覺を悟り、初めて求道の必要を感じられたのが此の光明會に入られる根本動機でありました。如何に學問あり知識ありとも眞實の信仰なくしては本當の人としての價値がない、殊に自分はその多くの僧侶に對して宗學を教へ乍ら未だ眞實の信仰を自分に持たぬとは何とした恥知らずであらうかとは師の深く自らに反省せられた所でありました。

かくて念佛の信仰は念佛そのものになりざるにありとの笹本上人の教へにより、自分も何とかして念佛して見たいとの氣分になられたので、或日笹本上人を其の御宅に訪ねられたのです。「上人私もあなたの御教によつて念佛して見る氣になりました、乍然辱しいことには私にはまだ眞の念佛が出ないのですが、願くは私と共に暫く念佛して下さいませんか」と頼まれました。その時笹

本上人が非常に喜ばれて、「それは何よりの事です是非私も共に念佛させていたゞませう。思い切つて七日でも十日でも徹底するまでやりませう」と、ところが、淺井上人まだそれほどまでの熱心では無つたので、これは困つた、そんなに引つゞき幾日も念佛するなどはとても自分の體には堪えられないことだ、然し今となつて自分から斷るわけにもいかぬ、何とかして、それまでに少々なりとも體をそれに訓して居かねばならぬと思はれた之が私と初めて伊豆の熱海に四日間の三昧會をとめるやうになつた動機であります。

其の頃の笹本上人と私とはそれこそ無二の道友でした、恐らくは笹本上人もそれを許して下さるでせう。私が上人を裏切つたか上人が私を裏切つたかそれは私共二人が一悉よく知つてゐるはずで、そして又それは如來様が更に一番よくこのことは御存じでせう。ところで當時の笹本上人は少くとも私を或る程度までには信じてゐて下さつた方なのでした。そしてまた、私の信仰に對しては可なりの共鳴と尊敬とを拂つていたゞいてゐた

のでした、そしてまた當時の私としては私自身の信仰に對して絶對の信頼を自らに持つものがありました。そこで笹本上人が日頃から淺井上人にも私の信仰と人格とに對して、應分の紹介はあつたと見えます。茲に於て淺井上人は其の足を以て私を芝の學寮に訪ねられてごこかで念佛がしたいがとの願ひでした。丁度大正五年一月の初旬でありました。辨榮上人が私の自炊してゐた學寮に寄留なされた翌年に當るのです。尤も私が淺井上人を知つたのは一年二年のことではありませんでした、昨年辨榮上人と共に北越に廻つた時にも己に知己の友となつてゐたのです。乍然かうしたことが念佛の動機で私は淺井上人に御供して熱海の誓院院に四日ばかりこもつたことがあります。淺井上人が自ら信仰の一分に直入することのできたのは無上の喜である人にも語られたのはその時でした。歸りに神奈川の笹本上人を御訪して夜も遅くまで三人で語り明かしました。それから間もないこと同年の三月頃かと思ひます。神奈川から一二里の山奥の閑靜な一寺院に三人でこもつて一週間の三

味會をつとめた事がありました。その時はもう淺井上人は一かごの念佛信者の一人でありました。唐澤の靈地が宗史に詳しい淺井上人によつて念佛の道場として發見せられると云ふことはかうした因縁をもととして考へれば寧ろ當然なことです所以上人は今一度三人でしつくりと何所かで念佛したいとの念願に燃えられまして、其の適當の場所を撰ふ中に此の歴史ある唐澤の靈地が淺井上人の心頭に浮び出て來たのでした。そこで其の歸郷の際此の地に立寄て其の下見分をせられたのがその時でした。

其の年の五月中旬、初めて此の記念すべき唐澤に私共三人が七日間の三昧會を營むことになりました。三日三夜一睡もせずにおトミルなどを食べて念佛になり切らうとしたのでした。それから毎年私だけはどうした因縁か未だ一度も此の地にまゐらぬとしとはありません。指折數へて十一年人生の五分の一を此の唐澤に參つたかと思へばまた必ずしも因縁淺しとは申されません。序ながら、京都の三昧會が勢至堂につとまるに至つたの

もその初めはこの浅井上人の首唱で、笹本上人の讃同私を中心としての三昧會をと云ふのがそももの動機でした。而も其の時は中島老師も五年の九月芝の鑑蓮社を引拂つて私共の學寮に移られ當時辨榮上人と三人で私が炊事役でありました關係上、辨榮上人中島老師をも御願ひして遂に勢至堂の三昧會が開かれるに至つたのでした。集まる者は全國の知友僅に二十人、晝は中島老師辨榮上人及び私の三人が交る交る信仰の法話をなし、夜は笹本上人を初め其他の有志が各々座談をしたものでした。私の大寶曼茶羅の畧圖も此頃に出來上つたものでした。全國を通じて念佛三昧會が一の流行の如くに強く廣がつて來たのは更らに之から數年の後に屬します。

其後歳變り星移りて、十何年を過ぎました、そして其の間に於ける幾多の道友も或は來り或は去る。無二の友と頼みけん昔の友も今は反つて反逆の友となり、寧ろ初めより無きに如かずとさへ歎かれた友もあります。乍然これも靜に考ふれば多

少共幾何かの道友でないものはない、皆悉く私共をして眞實の大道に到らしむる逆縁眞人の姿であります。反逆の友、私はあえて反逆の友と云ふ、乍然今更ら一人として私の心には惡むべきものとはありません。寧ろそれよりも過ぎし昔の友の親切を思出して昔にもまさる道友のよしみに限りなき愛着の一つさへ思ひ浮べずにはゐられない心がします。

我に來るものは榮え我を去るものは亡ぶ、私がかうした信念を今も尙ほ去ることができません。さうして私に來るものを見、私を去るものを見て此の觀念の更に一層に眞なるを思はずにはゐられないのがあります。

友よ私たちは如來を中心として念佛の裡に生きませう。そしてこれらの人々を悉く如來の大道に歸せしめねばなりません。片々たる虚偽の傳導師それらは私共の初めより眼中に措かない所であります。

唐澤山別時三昧會々衆芳名

大正十五年自七月二十二日至二十八日

愛知縣海部郡佐屋村	代表	土屋	觀道
同		黒宮	平八
同		黒宮	るい
同		眞野	野眞
同		佐藤	忠義
同		眞野	志岐雄
同		河村	政幸
同		黒宮	琴枝
同		黒宮	孝壽
同		中野	俊一
同		内田	千代
同		内田	とよ
同		内田	千代
愛知縣海部郡八開村塩田		松井	戒順
同知多郡半田町		片岡	憲三
西宮市市庭町		内田	憲二
愛知縣知多郡内海町東端		渡部	善兵衛
名古屋市中區南鍛冶屋町二		中川	イッ
同		東區南外堀町	
同區千歲町		崇徳寺	

同	同	加藤	祥瑞
同	中區御器所町烏喰	伊藤	留吉
同	同南區熱田神宮東門前	磯田	まさ
愛知縣西加茂郡譽母町	行基寺	吉田	國三郎
岐阜縣海津郡城山村	同内	山田	淳應
同	同内	山田	れん
同	同	齋藤	義信
同	同	桑原	和夫
同	同	桑原	省三
同	大垣市郭町竹橋	同	よし子
同	同	浅野	覺衛
同	同	服部	とみ
同	同	大橋	コウ子
同	同	佐藤	秀夫
同	同	浅野	寅次郎
同	同	白旗	靈光
岐阜市矢島町	本誓寺	栗生	來治
静岡市両替町三丁目		原吉	治郎
同後柏崎町柳橋		原哲	郎

同	見附町	今井善吉	日市北川原町	中野新一郎
同	柏崎町廣小路	渡邊八右衛門	三重縣三重郡鹽濱村 金剛寺	山里秀隨
同	同	同	同 飯南郡大石村	谷口春沙登
同	同港町	小池ユキ	同	谷口家實
同	同旭町	會田イ	同	土屋美和子
同	同	同	同	土屋美智子
同	同	同	同	土屋美智子
同	劉羽郡北條村杉ノ入	小林サダ子	同	中野良子
同	同	小林源一郎	同	神谷たね
同	神戶市神若通六丁目	松澤勝治	同	神谷たね
同	同	藤村よね	同	都樂七太郎
同	同	藤村よね	同	石井喜代藏
同	下山手通七丁目十四	榎本はな	同	山崎芳子
同	花隈町三七八ノ二	高倉ゆき	同	桑原町
同	大阪市天王寺區東平野町	貞松院	同	諏訪郡米澤村紫雲寺
同	同	南區高津九番町	同	上諏訪町唐澤山阿彌陀寺
同	同	天王寺區伶人町	同	同
同	同	西成區玉出町一〇六八	同	同
同	大阪府泉南郡西島取村	岩崎親雄	同	同
同	同	豊能郡麻田村螢ケ池	同	同
同	同	泉北郡上石村	同	同
同	新潟縣刈羽郡南鯖石村	佐藤益章	同	同

△吾朋便り

●南無阿彌陀佛

待ちに待った唐澤山の御別時も早や過ぎました美濃の御別時と云ひ今度と云ひ御熱心なぞして尊きお話を承り眞に有難うございました私の様なものでも偉大なる宇宙の眞理を自覺させて載くことの出来たるは何と云ふ幸福な事でございますせうとして一步／＼と信仰の階段を上つて佛の世界へ進みつゝある事は又何と云ふ悦びでございます今までの幸もなやみもすべて如來の恩寵としか思われません山川草木すべてのものは我々を説法してくれる様に感じます念佛は生活の中心でありすべての中心であり念佛を離れて他に何も無い様に感じます此の自覺を以つて悦びと望みと力とを感じ限なき宇宙の恩寵のまゝに生活しつゝ大いに働かして戴かうと思ひます

●南無阿彌陀佛

嬉しさの餘りつゝつまらぬ事を書いて申譯ありません亂筆お許し下さい皆様にもよろしく合掌 大正十五年七月二十九日 谷口家實

●南無阿彌陀佛
御上人にはお疲勞如何で御座いますか私は恩寵裡に今朝八時無事歸寺致しました、唐澤で養はれたる感激と奮闘にもえたる心を抱いて富士登山を恙なくさせて頂きました事を、衷心より感謝致します。雄大なる富士の姿よ。頂上に達し雲上の人となり大空を仰いだ時真人の人格向上に比ぶればさまざま高き感じは致しませんでした宇宙の無限など共に廣大なる恵のなかにつゝまれてゐる自己の餘りにミオヤのお慈悲に甘え過ぎて成す可き事も成さざる私は實に感慨無量で御座いました。奥様へよろしく御傳へ下さいませ初めて逢ひました洋服美智子様へ差上ります御納め下さいませ。

●南無阿彌陀佛

合掌 金澤高運拜

御上人様奥様初め皆様には御無事御歸京の御事と御推察申し上げます。

唐澤山では種々御教導に預りまして何と云ふ事なしに活き働き甲斐ある自覺の元に歸宅致させて頂きました事を深く御禮申し上げます。

僅かに此の七日間は如何に私の過去を通じて初めて知つた神秘的な莊嚴の世界であつた事でせう。信仰は研究にあらず體驗なりの實感をしみてと味はして頂きました。

我れ亦大宇宙の一分子として存在して居る以上絶對無限の無量壽無量光の如來様の御子の一人であるとの自覺を得て無限の感謝絶大の喜びに満ち、そして云い知れぬ活動の源泉力を養い得て勇躍歸宅致しました。御内佛に向つての禮拜の氣分、家族に對する氣分店員に對する氣分、友人に對する氣分其他種々の氣分が唐澤登山前と登山後に斯くも異なる物かと我れ乍ら此の變化に驚くのであります。

御上人様御喜び下さい、私は自己の確信する目的に向つては飽くまでも念佛を武器として佛子たる

強い自覺の元に突き進んで行く方の養成された事を痛切に感じらるゝのであります。願はくば此の觀念、此の氣分の一刻も我が日常生活より離れざる事を毎日々々眞劍に御念佛して居ります。

何卒今後共御指導御鞭鞭私の初めて獲得し得たる此の信念を益々向上せしむる様慈悲賜はり度いものと痛切に御願致します。

先は右御禮旁々餘りの嬉しさに私の感想の一端を述べさせて頂きました皆様によりしく願します。

本月御來越下さるとの事實に嬉れしく今より一同御待ち致して居ります。

本夜眞光寺に我等同志の眞生會例會を兼ね唐澤山の土産断をして清く一夕を過す豫定であります。

八月一日 原 哲 郎 三拜

南無阿彌陀佛
ほのばのと
あけゆくすかたみつむれば

見えぬ呼吸の波動をぞ知る
(汽車中にて)

御上人様には御揃ひ富士御下山の御事と御察し致

合掌 佐藤 益章

七月三十日

南無阿彌陀佛

御無事御歸京の御事と存上候此度は結構なる御別時に参加をさしで頂き何より嬉しく厚く御禮申上候又思ひかけなき登山にも相供ができた年來の望みも叶ひ殊更嬉しく存上候其後お上人様御氣分如何かと御察申居り候定めし御つかれの御つかれ

眼の感謝をさしげすにはおられませんでした。私共の集りがたゞ單張るところであります。今度と云ふ今度位各人がその意味に於て目醒めていたことには全く近來にない喜びでした。各人で床の上下、御膳立の用意、風呂の立替へに至るまで男女を問はず一同が

◆東京 土屋觀道

今年の唐澤三昧會は例年に比しに避暑の爲めの集りでも無く又た更に一段の進境と熱心なる求道の、單に如來の慈光に徒にひたつて氣分に充實していた観がありまし遊ぶ爲めのものでも無く、如來のた、又年々に唐澤の靈地が道友の光明の裡に入りひたつて、而も其集りに非常の便宜を興へていた、の中から眞に社會に活動して其上組を分つていたされたことはこれ

ではなかつた。かゝることは毎年士の出よ天上天下悉く一種の唐澤三昧會の行事の一つではあ靈氣に充ち満たされるのを感じずるが私は斯うした覺悟と働きが如にはゐられませんでした。目眩ひ來の慈光を中心として、全人類のするほど眼下遙に白雲が波をなし日常の上にも顯はれんことを切望して大空に擴つていゝさまじさ、

して止まぬものであります。壯觀と云ふも愚かです、頂上の神歸途には急ぎ郷里に歸る人もあり社詣や下山の砂走りの砂滑り一と亦折角の旅立のこととて之を利用して私の心に新しき深き印象を興して更に各地の視察や名所巡行にへぬものとはありませんでした其の心を練る人もありました。そ打とけた道友の道連れそしてかうして又私はかうした清い心の旅立した心からなる道人の集い私は正を全生を通して多くの人々に勧めに眞生そのものの觀でありましたたい考であります。道友の各人南無阿彌陀佛

には此のまた心が各々善意に充分此度唐澤山に於而痛烈なる御教化の了解があることは上ない私の喜により最も崇高なる佛子の覺りをびです。開かして頂きました事

私に歸途阪神の人々十二人と永年宇宙即如來
の望みであつた富士に登りました如來即我
何と云ふ美しい而も壯麗な富士の宇宙の生命不滅なるが故に
雄姿よそして又何と云ふ雄壯な富此生命は永遠不滅なり。

淺薄な凡夫の私如き者の何と云ふ
貴い有難い事でありませう衷心に
如何にも合掌せざるに居られません
過去を觀じ來りますれば御上人よ
り十數回となく御懇篤なる御說法
により己に信仰を得し如く思ひ大
道を活歩致せし事何と云ふ淺間敷
事なりしかを追念し告白致します
南無阿彌陀佛合掌 渡邊八右衛門

○七月は休刊致しました

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋 觀道
發行人 東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 三井 清次
東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 精進堂印刷所
東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 大正十五年八月十一日印刷納本 (大正十四年八月十三日) 大正十五年八月十一日印刷納本